

編 集 後 記

昨年11月に消化器外科専門医が厚生労働省から認可され標榜可能となりました。国民の期待にこたえて消化器外科の専門性を高め、より良い医療を提供しようとする本学会の固い意思が多くの困難を乗り越えてこれまでこれた原動力と思われまふ。毎回の学術集会をはじめ専門医試験制度の確立、それに関係する教育集会、そして中間法人化など様々なところで苦勞された先生方および事務局、そしてそれを支えた会員の皆様と共にこれを喜びたい。

この厚生労働省の発表を直前にして小山研二元会長が昨年10月末に逝去されました。先生は本学会が最も困難な時期にあって難しい問題に正面から対峙し、会員を大切にしながら身を削ってその難局を乗り越えられた。会員を信頼すると同時に多くの会員の信頼を得て始めて乗り越える事が出来たものでありまふ。先生はご自分の会長在任期間に大きな問題を2度も生じさせてしまったという責任を強く感じておられました。会長を終えられたあと名誉会員になることを頑なに辞退されたのはこの様な理由からでした。先生は専門医の認可の正式な知らせを聞く直前に天国行かれましたが、会員の為に今回のことを大変喜んでることと思ひます。しかし、一方では「これは日本消化器外科学会が目指す坂のまだほんの途中であつて、登らなければならない道はこれからが本番なのだよ」と言っているに違ひありません。本学会の前途に期待すると共に、何時の日か、本学会における故小山研二先生の名譽回復を期待したいと思ひます。

さて、学会発表や論文を作成するには大きなエネルギーが要ります。消化器外科専門医には診療に加えてこのエネルギーも必要とされています。臨床の現場ではPOSを繰り返し実践し記録することで、いろいろな課題を発見することが出来、資料を集めてこれを評価し、さらに audit することで新しい提案も出来ると考えまふ。その継続的な努力の結果、本誌に優れた消化器外科に関する症例報告や原著論文がさらに数多く投稿されることを祈つております。

(佐々木 巖)